

北海道の 学校図書館

— 創立70周年記念特集号 —

発行 北海道学校図書館協会
 会長 渡部 浩士
 事務局長 佐藤 正行
<http://sla.gr.jp/~hokkaido-sla/>
 印刷所 (株) 有 伸 商 会
 TEL (011)814-6211

北海道学校図書館協会70周年に寄せて

北海道学校図書館協会 会長 渡部 浩士
 (札幌市立新川西中学校長)



北海道学校図書館協会は、昭和24年10月19日の創立以来、今日まで70年の歴史を積み重ねながら輝かしい活動の成果をあげてきました。この歳月、学校図書館教育に熱い情熱を傾けた諸先輩方の献身的なご尽力に心から敬服するところです。本来であれば記念式典を挙行し、先人のご労苦と偉業を振り返って、この節目を多くの方々と喜び合いたいところです。しかしながら、状況がそれを許さず、紙面のみにて思いを重ねることとなりましたことは誠に遺憾に感じております。

平成11年、創立50周年の折は会長の大東 紘氏によって275ページの厚さとなる記念誌が発行されました。その中で大東氏は「これからの学校教育の課題は、基礎基本を基盤としながら、個性を尊重し、広く柔軟に対応できる創造性を培っていくことである。子どもたち自身が主体的、意欲的に課題に取り組む『調べ学

習』を進めるためには、学校図書館の存在が不可欠である。学校図書館は教育を変える、という基本的な理念に立って、私達は、今こそ学校図書館存在の重要性を具体的な実践活動を通して広めていかなければならない。」と述べています。先達の熱い思いと先見性の高さを改めて実感した次第です。

以降は、平成13年 阿知良 光治氏、平成15年 大川 秀明氏、平成17年 鈴木 文夫氏、平成19年 貴戸 和彦氏、平成21年 大久保 雅人氏、平成24年 浦田 日出雄氏、平成26年 門前 智氏、平成28年 齋藤 昇一氏、平成30年 黒澤 敏行氏が会長を務め、組織を牽引してくださり現在に至っています。

さて、平成29年3月31日に告示された現学習指導要領では、その総則において「学校図書館を計画的に利用しその機能の活用を図り、児童（生徒）の主体的、意欲的な学習活動や読書計画を充実すること。」を謳い、学習で十分活用できる学校図書館の整備充実が必要であることを強調しています。これは学校図書館が、想像力や情操を育む「読書センター機能」とともに、「学習センター機能」「情報センター機能」の役割も十分に果たすべきという使命感を改めて胸に刻ませるものとなりました。これからの学校図書館での教育活動は、教育課程の中に必然的に組み込まれ、電子データも含めた多くの資料が活用される環境整備が更に重要となってきます。

70年の歳月を振り返るに、戦後教育は、子どもを自主的・自立的存在として育てたいとの思いの中で誕生しました。それまでの批判的精神に乏しく権威に盲従しやすい国民性から脱却すべく、「教育においても、教師が教えるところに生徒が無批判的に従わせるのではなく、生徒が自ら考え自ら判断し、自由な意思をもって自ら真実と信ずる道を進むようにしつけることが大切である。」(昭和23年 文部省『学校図書館の手引』)として、主体的に学ぶべき場として、学校図書館が位置づけられたのです。現学習指導要領で大切にしている「主体的・対話的で深い学び」の考え方はまさに、学校図書館の使命の中に連綿と生き続けてきたと言っても過言ではないと考えます。

現在、北海道学校図書館協会は、学校図書館の充実発展を図り、教育の振興に努めることを目的として、以下のような多くの活動を推進しています。研究活動として、全国 全道学校図書館研究大会の参加と開催、学校図書館研修講座の開催等。事業活動として、読書感想文コンクール、読書感想画コンクール、中学生作文コンクール審査。普及活動として、機関紙や感想文集の発行、優良図書を選定紹介等。その他様々な組織運動、活動や協賛・協力活動を展開しています。そして、これからも学校図書館教育向上のため、全力で活動を継続していきたくと思っています。

最後に、この記念特別号発刊の趣旨をご理解頂き原稿を寄せて下さった多くの方々に心からお礼を申し上げ、ご挨拶といたします。

創立70周年記念の祝辞

公益社団法人全国学校図書館協議会 理事長 設 楽 敬 一

北海道学校図書館協会創立70周年おめでとうございます。『学校図書館50年史』(全国学校図書館協議会)には、「北海道学校図書館協会の前進である函館市学校図書館研究会(函館市SLA)が1947年11月11日に創立された」とあります。また、「函館市SLAを先達として、1949年～50年の間に「学校図書館教育運動」が動き始め、組織化され、研究活動・実践活動・運動が、全国組織やアメリカ教育使節団等との交流のなかで、産声を上げ育てられていった」と明記されています。北海道学校図書館協会が1949年10月20日、北海道立図書館に事務局を置き創立したことは、学校図書館研究団体の誇りです。

日本の国土の約20%を占める広大な地域である北海道の全域を掌握するには、並々ならぬ努力が欠かせないものと思います。北海道学校図書館協会の組織力と行動力は、全国の学校図書館教育運動の模範だといえます。例えば、伝統の「北海道学校図書館研修講座」は53回を数え、教育委員会との共催による今日的テーマを捉えた研修会であります。更に、1988年の「第26回全国学校図書館研究大会(札幌市)」では、約2,500名の参加者があり、隔年で開催の「北海道学校図書館研究大会」も44回を数えるなど、大きな成果を残しています。一方、読書感想文コンクールでは、「青少年読書感想文全道コンクール」「北海道指定図書読書感想文コンクール」を主催し、読書感想画コンクールでは、2013年の「第25回読書感想画中央コンクール」から全国規模のコンクールも主催しています。こうした活動を広大な全道に限なく伝えるためのウェブサイトも充実しています。

このように、北海道学校図書館協会は、研究・研修活動と読書推進活動を踏まえた学校図書館教育運動の先駆けとしてこれまで多くの伝統と実績を積み重ねてきたことに心より敬意を表すとともに、今後のご発展を祈念してお祝いの言葉といたします。

創立70周年をお祝いして

北海道立図書館長 宇 田 賢 治

この度、北海道学校図書館協会が創立70周年を迎えられたことを心からお祝い申し上げます。

子どもの読書活動は、「子どもの読書活動の推進に関する法律」の基本理念に掲げられているとおり、子どもが、言葉を学び、感性を磨き、表現力を高め、想像力を豊かなものにし、人生をより深く生きる力を身につけていく上で欠くことのできないものです。

子どもにとって身近な読書環境である学校図書館は、御存知のとおり学校の教育課程に寄与し、児童または生徒の健全な教養を育成することを目的に設置されています。

昭和28年に「学校図書館法」が成立して以降、平成9年の一部改正により、11学級以下の学校を除くすべての学校に司書教諭を置かなければならないとされ、平成26年の一部改正では、学校図書館に学校司書を置くよう努めなければならぬとして学校司書が法律に位置づけられました。

こうした人的配置の促進のほか、平成28年には、文部科学省が「学校図書館ガイドライン」を定め、学校図書館の運営上の重要な事項についてその望ましい在り方を示すなど、学校図書館の整備充実が図られてきています。

そうした中で、昭和24年10月の設立以来、長きにわたり、貴協会が「北海道学校図書館研究大会」や「北海道学校図書館研修講座」を開催して会員の学校図書館に関する見識を深め、「北海道指定図書」の選定と普及により子どもたちの本や読書に対する興味関心を喚起するなど、様々な事業を通して研鑽と実践を重ねてこられたことは大変意義深いことであり、改めて道内の学校図書館の充実・発展に大きく貢献されてきたことに敬意を表します。

さて、創立当初、貴協会の本部は、当時、札幌市北1条西5丁目にあった当館に置かれており、当館との関わりは貴協会の創立にまで遡ることができま。

その後も、道内における学校図書館研究の進展に資するために、昭和39年からの一時期、貴協会の「北海道学校図書館研究資料センター」が当館内に設置されていたことがあるなど、大変深い御縁があります。

その御縁は、北海道の図書館活動全体にも広がっており、毎年開催している「北海道図書館大会」は、公共・学校・大学・専門といった館種を越えて道内の図書館関係者等が一堂に会して、当面する今日的課題について研究協議を行い、共通理解を深める貴重な機会となっています。貴協会には、大会を主催する「北海道図書館連絡会議」の構成団体として、大会の企画や学校図書館に関連する分科会の運営に携わっていただくなど、本道の図書館活動の発展にも、お力添えをいただいております。

本道における子どもの読書活動の推進については、現在、令和4年度までの5年間を計画期間とする道教委の「北海道子ども読書活動推進計画<第四次計画>」の中で、北海道の全ての子どもがあらゆる機会とあらゆる場所において自主的に読書活動を行うことができるよう、家庭・地域・学校等の連携を進め、積極的にその環境整備を図ることとしています。

北海道立図書館といたしましては、市町村立図書館(図書室)等の職員を対象に、学校図書館との連携をテーマとする研修会を開催するほか、学校図書館に対する運営相談や、資料の協力貸出し等を実施するなど、各市町村が行う子どもの読書環境の整備や読書活動の推進に関する取組に対し様々な支援をしております。

こうした当館の事業に対する貴協会のこれまでの御協力に感謝申し上げますとともに、子どもの読書活動の推進、また本道における図書館の発展のために、引き続き、広く御支援・御協力を賜りますようお願い申し上げます。

結びになりますが、北海道学校図書館協会の今後ますますの御発展と、会員の皆様の御健勝と御活躍を祈念して、お祝いの言葉といたします。

温故知新—古きを温^{たず}ね新しきを知る—

北海道学校図書館協会 顧問 吉田 裕 男

終息の行方も定まらないコロナ禍のなか、日々の実践に取り組まれている皆様にエールを送ります。

先日、北海道SLA会長渡部先生より、道SLA創立70周年の記念広報紙の発行と70年のなかで出来事や回想を寄せるようご依頼を受けました。温故知新、有難い事と感謝です。

小生、1996年小樽大会を終わらせ定年退職、その翌年1997年「学校図書館法」の一部改正が行われ、永年の念願であった司書教諭の配置、学校司書についての明文化など、思わず叫び声をあげました。学校図書館を語る時、いつも話題になる一件が、明るみを帯びた瞬間であったことが鮮明に甦ってきます。

因みに「学校司書」の呼称は1957年開催の「第8回全国SLA研究札幌大会」で初めて設けた「学校図書館事務職員の分科会」に基づく呼称なのです。

法の改正に伴い司書教諭の養成は急務であり、小生も教育大非常勤講師として任に当たりました。

その後の学校図書館は時代の変化や教員からの要請などで大きく変わったことは、ご承知のことだと思います。小生の一番強烈な思い出は札幌市が学校図書館の在り方を求めて興した寄託図書制度と学校図書館地域開放事業の策定です。特に寄託図書制度は、制度ありきではなく、現場の実践からの生の姿から生まれたものだと考えています。趣旨や内容等は2000年発行の全国SLA機関紙10月号に、教育委員会指導主事・大友裕之氏が述べられていますので省きます。

当時の札幌教研は、教科部と教科外部の二部会で運営されていました。学校図書館部は読書指導や図書館の分掌の先生方も所属していて、教科の活発な研究とはいかず、図書館運営の悩みや課題を話題にしたり、現状を交感しあったりすることが多かったように思います。小生は白石区図書館部に所属し取りまとめ役で関わっておりました。「今、学校図書館はどうあるべきか。」「教科の様に、授業はできないものか？」等々。

「授業をしたい。集団読書の授業をする」本郷小・大川先生（現ふくずみ幼稚園長・道SLA顧問）『『ペロ出しチョンマ』斎藤隆介作を取りあげての授業をしよう！』集団読書の資料だから少なくとも20冊が必要です。無論購入できるはずありません。部の中で話し合い、部報で区内の学校への貸し出しをお願いをしたところ、20冊を越え学級全員の本が存在することがわかりました。次は、各校からの借り受けの方法や届けたり回収したりすることでの問題点が判明しました。札幌教研の事務局・顧問の先生の相談の結果、市教委が手配の赤帽車を使って収集・回収が可能となり、集団読書の授業が実現しました。

授業後の話し合いの中で、活用できる図書館資料（図書資料）の質や量などたくさんの課題や希望が話し合われました。この実践が寄託図書制度策定に至る一つの実践であったことと自負しております。

寄託図書と一般校へのサービス機関として札幌市学校図書館情報センターが設けられました。札幌市が策定した事業は、学校図書館の在り方を求めての施策であり、全国SLA研究大会において歴代の教育長が参加者に向けて発表されることになっていったのです。

※

今ひとつ忘れられない思い出があります。学校図書館に携わる私達の共通の課題は、これからの教育にど



う学校図書館を反映させるのかということでした。すなわち、資料センター・学習センター・情報センターとしての役割をどう発展させるのか等々の懸案が取り沙汰されていたのです。課題の究明が高まり、道SLAの13名を中心に総勢25名のアメリカ・カナダ視察旅行団が結成されました。

全国SLAのアメリカ・カナダ視察団として1985年1月5日、年明けの早々千歳空港から彼の地シアトルに向けて飛翔したのです。団長は全国SLAの事務局長の佐野友彦氏、海外視察のエキスパートで「サノ・カミカゼツアー」と称され、朝は暗いうちに出発。学校や施設などタップリ視察。夕刻灯が点る頃にホテルに戻るというツアーでした。出発前に札幌全日空ホテルで行った事前の学習会・講習会での洋食マナーの実習は何だったのでしょうか。ホテルに戻ってコンビニに駆け込み、次の日の食料の調達、昼は学校給食。帰国後は全員レポート提出と「個別学習を支えるリソース・センター」となる冊子の原稿書き。「カミカゼツアー」で良かったのか？悪かったのか？

訪問した学校や施設は13日間で実に40箇所を超えていました。学校区はタコマ・ハイライン・フェンデル・ベリンハムの5学区。カナダではバンクーバー市の学校等々。1月16日（水）快晴、9時50分カナダ出国。14時7分2時間遅れて離陸。私達はアメリカを離れました。太平洋に沈みかけた太陽。夕焼けの空。機はひたすら成田へと飛んでいました。



【感謝！】北海道学校図書館協会創立70周年に寄せて

苫小牧学校図書館協会 会長 松井操人
(苫小牧市立拓勇小学校長)

私が北海道学校図書館協会と関わりを持つようになったのは、もう30年近く前のことです。当時の勤務校で、自身初めての「図書室担当」を命じられ、何をどうしていいものやらと途方に暮れていたところに「北海道学校図書館研修講座」の存在を知り、参加。学校図書館の重要性を知るとともに、学校図書館を中心とした学校教育の可能性を強く感じさせていただきました。

当時はまだまだ学校図書館の存在感が薄く、授業での活用や子どもの読書活動の活性化をどう進めるかなど課題もたくさんありました。北海道学校図書館協会は「『教育課程の展開に寄与する』『児童生徒の健全な教養を育成する』学校図書館」という学校図書館法の理念のもと、読書感想文コンクールや選定図書など読書活動の充実をはじめ、道内の学校図書館の課題解決に向けて情報の発信と研修の場の提供を続けてくださいました。

北海道学校図書館協会の研究活動の中核として、「北海道学校図書館研究大会」が挙げられると思います。第1回目は戦後まもなくの昭和24年、今年度の函館大会が「第54回」ということです。苫小牧では、これまでに平成3（1991）年の第29回大会と、平成15（2003）年の第35回大会を開催いたしました。個人的には、平成15年の大会に大会事務局長として関わり、平成27（2015）年の室蘭大会にも準備段階で関わらせていただきました。そして、次回の第55回大会は、令和5（2023）年に苫小牧で開催いたします。

このように、北海道学校図書館協会は北海道の子どもたちの読書活動の推進や学校図書館の整備・充実はもとより、言語活動や探究的な学習などの授業改善を牽引し、研究活動にも精力的な取組を続けてくださり、そのおかげで、北海道の学校図書館は大いに活性化いたしました。改めまして、ここに深く感謝の意を表する次第です。

北海道学校図書館協会創立70周年、誠におめでとうございます。そして、今後ともどうぞよろしくお願ひいたします。

北海道学校図書館協会 70周年に寄せて

小樽市学校図書館協議会 会長 森 万喜子
(小樽市立朝里中学校長)

北海道学校図書館協会創立70周年、おめでとうございます。北海道の子どもたちをよい本とつなげるために、これまでたくさんの会員、役員の方々のご尽力があったことと存じます。

とりわけ、私の心に残っているのは平成25年に開催されました、北海道学校図書館研究大会小樽大会のことです。学校図書館の環境整備、蔵書の充実に対して政府の政策は追い風となっていた時代ではありましたが、各学校種間で学校図書館の充実、学び方指導、読書指導等の体系的な連携は未整備であり、学校図書館司書も未配置という状況のなか、少ないスタッフで全道研究を開催する事が決まったときには「さて、どうしよう…」と、正直困惑したものです。

その後、北海道学校図書館協会の役員の方々、地元小樽の図書館関係者、特定非営利法人絵本児童文学研究センター、そして、子どもと本をつなぐことこつこつと取り組んでこられた多くの同志の方々のお力添えで、無事に研究大会が開催できたことは、あれから10年経っても、まだ鮮やかに心に残っています。本当に、うれしくて、ありがたくて、貴重な体験と時間でした。

時は経ち、今はGIGAスクール構想で、児童生徒にはひとり1台のタブレット端末が配備され、日常の授業でも活用されています。学校図書館もいずれデジタル化にシフトしていくのかもしれませんが。時代は変わっても、書籍から得られる新たな発見や魅了される体験は無くなることはないでしょう。

本が身近にある人生の豊かさを、私達も学校図書館に集う仲間から得ました。学校という場から人はいつかは離れていきますが、学校で蒔いてもらった種を抱えて、いつか芽吹き、繁り、花を咲かせ、実らせる日がきます。

学校図書館に集う、種を蒔く人たちに感謝と敬愛の念をこめて、心から御礼申し上げます。

これからも、北海道学校図書館協会の活動に榮えありますように。

北海道学校図書館協会創立70周年に寄せて

元旭川市学校図書館協会 事務局長 加藤 宏明
(旭川市立近文第一小学校)

北海道学校図書館協会創立70周年、おめでとうございます。このような歴史ある協会に所属し、研究活動に参加できたことに感謝しますと共に、先達先輩の諸先生方、同輩後輩の皆様に、心からお礼申し上げます。

初めて私が学校図書館（図書係）を担当したのは、平成4年度でした。吹雪の道立研究所で2泊3日泊まり込みの研修講座は、目からうろこの落ちるようなことばかりで、学校図書館の活動に一気にはまりました。平成6年度には、岩見沢市で開催された「司書教諭養成講習」を受講。平成7年度に旭川市内に転入して旭川市学校図書館協会・道SLA旭川支部に参加し、以来30年お世話になりました。

「子どもが本を読まない国に未来はない…」と肥田美代子さんらを中心に国会議員が動き、国が司書教諭の配置に向けて漸く動き始めました。平成15年度の司書教諭配置へ向けて制度整備と人員確保が急ピッチで進み、渦中にいた者として目の回るような思いで働き、勉強もしました。

平成15年の苫小牧大会直前に、次の大会が旭川に決定しました。それからの2年間は多忙を極め、殆ど記憶は残っていません。道SLAに全面的なご支援を頂き、関係各位に無理なお願いを重ねて、旭川市SLA会長・中西慧子先生を中心に大会運営に取り組みました。400名を越す参加をいただき、責任を果たすことができたことと安堵しました。

その後、上川管内に転出した私は、学校図書館に携わっていたおかげで、管内市町村の皆さんと繋がることができ、平成27年に旭川市に再転入後は、各学校の担当者や学校司書と連携を深め、市教委、上川教育局、各校長会をはじめとする関係各機関のご支援を頂いて、令和元年10月4日・5日、267名の参加者による旭川大会を開催することができました。ただ、この大会の運営委員長・藤原 淳先生が、令和3年10月10日に病で急逝されましたことが残念でなりません。今後は学校図書館に志を持つ皆さんが、健康で一層のご活躍をされることを願っております。

70周年おめでとうございます

元岩見沢市支部 事務局長 金子 智 里
(砂川市立石山中学校 司書教諭)

70周年おめでとうございます。

私が、北海道学校図書館協会の活動を知ったのは、前任校に勤務していた頃、15年位前のことです。自分が小学生の頃は、毎日のように学校図書館に行って本を借りたり、隣の市立図書館に寄って帰ったりという生活を送っていたはずなのですが、年齢が上がるにしたがって、「図書館」という存在も遠いものとなっていました。

教師になってからも学校図書館の活用はほとんどなく、教科で意味調べを行うときに生徒を連れていく程度でした。

そんな中、北海道学校図書館協会の存在を知り、研修講座や研究大会などにも何度か参加させていただき、「いくつになっても学ぶことはたくさんある。」と思うことができました。

特に、初めて参加させていただいた、小樽での研究大会では、「こんな授業があるんだ！」ととても驚いたことや小樽の皆さんが作ってくださったトートバックを手に入れて、たくさんの資料や本を持ちかえたこと、講演会では、生「工藤直子先生」を遠目で見られたことが、とてもとても思い出に残っています。

その後、夏休みをすべて使って司書教諭の資格をとって現在の学校に赴任してからは、分掌も図書館担当となりましたが、毎日の教材研究や校務、部活などあまり思ったような図書館経営ができていないと感じています。

コロナ禍やプライベートの理由で、北海道学校図書館協会の活動から遠ざかっていましたが、また、たくさんの新しいことを勉強するために、残り少ない教員生活を充実したものにできるように頑張りたいと思います。

あの時の学校図書館の思い出

元札幌市学校図書館協議会 会長 開発 好 博

私は札幌市SLAを中心に活動してまいりましたが、全道大会、全国大会などがあると道、市の関係がなく一緒になって取り組んだ記憶があります。その中で一番の思い出は、昭和の最後、札幌市で開催された全国大会。未経験ながら広報担当ということで、大会の紀要、集録作成だけでなく「大会だより」を毎日発行したことが今でも記憶に蘇ります。例えば、紀要原稿も集録原稿も忙しい中での執筆なので、ついこちらも催促連絡しがち。締め切りの数日前に「そろそろですが進捗状況は…」という具合に、当時はもっぱら公衆電話ボックスで、10円玉の山を用意して全国へ電話を掛けたものでした。

また、集録は、記録の先生方中心に分科会の様子などまとめてもらいましたが、特に講演などはテープ起こしを、無謀にも各講演をお一人に担当していただきました。おそらく夏休み中かかったかと思いますが、今でも申し訳なく思っています。以後は一人10分程度分散してお願いするのが常識かと。知らないこととは恐ろしいものですね。

毎日発行した「大会だより」は、今では全国大会の定番のようになっているようですが、授業、分科会、参加者の感想はもちろんのこと、図書館の話題、一口観光案内などでんご盛りの内容。それを、たくさんの先生方が記者となって取材、執筆。その日の夕方にはビルの一室で、出始めのワープロを持ち寄り編集作業、次の朝には配布という当時としてはかなりの流れ。今思い出してもよくできたと感じます。その部屋に集まって作成していた熱い空気や顔が忘れられません。それぞれができる分野、力を総動員した取り組みに、達成感を、反省会、打ち上げで、昭和が終わったという放送を聴きながらかみしめたものでした。

あれから、30年以上は経ったでしょうか。2年に一回全国、全道大会を繰り返し北海道から多くの提案、発信を続ける北海道学校図書館協会の営みを、今は少し離れた場所から見守っていきたいと思います。

北海道学校図書館協会創立70年

空知支部 事務局長 古 関 亮 子
(砂川市立空知太小学校 司書教諭)

70年の長きに渡り、北海道の学校図書館教育を牽引していただきありがとうございます。70年と言いますと、戦後、平和な文化国家を築こうと整備をすすめる中での創立だったと思います。北海道は、明治維新に他県で学校図書館の配置がすすめられるとき、まだ開拓の半ばであったのではないのでしょうか。その先見の明の確かさに感謝しています。

わたしと学校図書館協会との関わりは、読書感想文コンクールになります。市内コンクールを経て、全道に作品が送り審査していただき、感想文集、表彰式の存在からたくさんの方たちが関わっていることがわかりました。

また、毎年、開催していただいている研修講座で多くのことを学び、多くの人と出会いました。他の人の実践を聞き、自分でも創意工夫し、実践に結びつけてきました。研修講座や研究大会に参加すると、全道にこんなにもたくさん学校図書館を研究している力強い仲間がいると、勇気と元気をいただきました。

しかし、この学校図書館に関する認知度は、学びの中心に成り得るのにも関わらず地域差があり、活動も思うようにいかないという実態があります。現職の教職員が図書館を使つての学習を経験していない人が多いため、図書館を使って学習しようとは思ってもよらないのではないかと思います。また、1人一台の端末、デジタル教科書の時代がきました。学校図書館には、印刷メディアだけではなく、コンピュータ、WIFIを整備しメディアセンターとして、両方の情報をコーディネートできるメディアスペシャリスト（司書教諭と学校司書）が必要とされるでしょう。

とりまく環境がかわっても、学校図書館は、学校中の情報が集まる学びの中心に成り得ます。また、読書は確実に人生を豊かにします。学校図書館は、読書の楽しさを知るきっかけにもなります。このような願いを北海道学校図書館協会に牽引していただき、さらに発展していただきたいと思います。

北海道学校図書館協会創立70周年に寄せて

函館市学校図書館研究会 風 間 睦 月
(函館市立石崎小学校 教諭)

北海道学校図書館協会の創立70周年記念に際し、全道大会を中心に、私が関わりましたことについて振り返ってみたいと思います。

私が初めて全道大会に参加させていただきましたのは、平成17年度の第36回旭川大会でした。総勢9名で旭川を訪問し、平成19年度の第37回函館大会に向けて、運営の様子を見せていただくことが大きな目的でした。私自身は、初の提言を仰せつかり大変緊張していたことを思い出します。全道規模の大会に初めて参加して、学校図書館の役割を再認識し、自分にできることは小さなことですが、「何かやってみよう」という勇気をいただいた大会でした。

次に参加したのは、平成23年度の第39回十勝大会でした。その前年度から、函館支部では研究部が中心となり、初めて図書担当になっても運営できることを目指した運営マニュアル「学校図書館はじめの一步」の作成に取りかかっておりました。当時の竹内幹事長や研究部長と部員が何度も集まり、知恵を出し合って作ったことが思い出されます。十勝大会では、そのマニュアルを福崎現研究副部長と一緒に紹介させていただきました。

平成24年度から4年間は、事務局を担当することになりました。竹内前幹事長から引き継いだときは会員数も多く、それを維持し1年間の取組が滞りなく進むように努めることで精一杯でした。研究部や事業部などがそれぞれ各業務を分担して活動しており、会員の皆さんに支えられた4年間でした。函館市学校図書館研究会は、昭和22年に設立された歴史ある研究会であり、学校図書館への熱い思いが大先輩の方々から脈々と引き継がれています。今年度は、コロナ禍の中ではありますが、多くの方々の努力と協力によって、第44回函館大会が『そうだ、図書館へ行こう！』を合い言葉にリモートを活用して開催されました。「読書好きの子どもを育てること」を大切にしながら、仲間の輪を広げ、発展していくことを願っています。

今後も、北海道学校図書館協会の活動から、多くのご示唆をいただければ幸いです。

北海道学校図書館協会との思い出

苫小牧学校図書館協会 菅原清美
(苫小牧市立沼ノ端中学校 司書教諭)

私の北海道学校図書館協会との関わりは、採用されてから参加させていただいている「学校図書館研修講座」から始まりました。

最初の頃は一参加者でひたすら教えていただく立場であり、すみっこでメモを取り、学校に帰ってから自分の図書委員会などの活動に使えることやネタを探しているような感じで過ごしていました。

少し深く関わるきっかけは、苫小牧市に転勤して、市の教育研究会で図書館部会に参加して、苫小牧市の『図書館利用の手引き』の作成や学校図書館全道大会の運営に携わることになってからと記憶しています。

その後研修講座で佐藤敬子先生やたくさんの先生方に声をかけていただいて、少しずつ様々な地域の先生方とも交流をさせていただきました。また、社会科で学校図書館を活用する実践が少ないということで、全道大会での発表の機会もいただき、それがその後の発表や実践を公開するきっかけになっていったと思います。

そして何とんでも、なぜか自分が講座を持たせていただいていたということが、思い出というか今だに驚きを隠せません。元々、本が好き、歴史好き、マンガアニメ好きのオタク要素満載のところがありますが、なぜかそこを役員の先生方が面白がってくださり、ナイター講座で「おすすめマンガ」を持たせていただくことになりました。参加された先生方が教室で生徒と一緒に楽しみ、子どもたちが心の栄養としてくれたマンガを紹介して、全道各地に広めていったり、先生方自身の楽しみを見つけたりしていく所を一緒に体験し、私自身もとても勉強になりました。このような機会をくださった北海道学校図書館協会には感謝しております。

令和5年には再び苫小牧市での全道大会を控えています。これからも様々な学びをいただき、自分や生徒達に還元できるように頑張っていきたいと思えます。ありがとうございました。

同志との出逢いをくれた学校図書館協会

苫小牧学校図書館協会 副会長 井村友美
(苫小牧市立拓勇小学校 教頭)

北海道学校図書館協会創立70年、おめでとうございます。

私は、北海道学校図書館協会に約20年お世話になっています。きっかけとなったのは、平成15年に行われた北海道学校図書館研究大会苫小牧大会です。この大会の前年度、苫小牧市に異動した私に、当時の同僚が、「学校図書館に興味ない？」声を掛けてくれたことから始まっています。

苫小牧大会を振り返ると、指導案の検討、袋詰め作業、分科会の運営を担当しただけで、全くなりなれていなかったと反省させられます。しかし、この大会で私はとてつもなく大きなものを得ることができました。それは、苫小牧市の学校図書館を支える方々との出逢いです。

私は、大会終了後も苫小牧学校図書館協会に所属し、仲間と地道に活動してきました。2年に一度開催される北海道学校図書館研究大会に苫小牧の仲間と参加して楽しく研鑽したり、苫小牧の学校図書館教育の様子を分科会で発表させていただいたりしました。また、苫小牧市内では、学校図書館の魅力を積極的に発信し、「教育課程に寄与する学校図書館」について多くの人に理解してもらうことを大切にしながら活動を進めました。このような活動が功を奏し、また、近年、学校図書館が主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善の場としての役割が重要視されていることから、新しい仲間が少しずつ増えてきています。

令和5年度には、北海道学校図書館研究大会苫小牧大会が開催されます。苫小牧の仲間と何年も待ち望んだ研究大会です。これまで同様、人と人とのつながりを大切に、苫小牧大会の成功を目指して尽力してきます。今後とも、どうぞよろしく願いいたします。

北海道学校図書館協会創立70周年に寄せて

学校図書館研究会inオホーツク 顧問 橋本 雄一郎
(日高教育局 義務教育指導監)

「オホーツクが熱い」。道内の学校図書館関係者の間でそんな言葉が聞かれるようになるのは、10年前には思いもよりませんでした。この数年、学力対策に関わり、管内でもようやく学校図書館が目されるようになり、網走市・北見市・紋別市で学校司書が、大空町・美幌町などでも学校図書館担当の公共図書館司書が配置され、学校図書館の環境が大きく向上しました。

全国学力・学習状況調査に見られる道内の平均正答率の偏りは何によってもたらされているのか——授業改善や家庭学習を否定するつもりはありません。しかし、オホーツク管内では、本があって、人がいて、学校図書館で子どもの学びを支えるという、他県では当たり前のことが何十年にもわたって放置されてきました。信じられない話ですが、学校図書館自体が無い学校さえありました。

先生も管理職も学校図書館で学んだ経験がなく、「図書室」と呼ばれる本の墓場は、読書の好きな子が本を借りる場所に過ぎず、学校図書館が教育課程の展開に不可欠な場所という認識はありませんでした。授業以前の部分で地域的なハンディキャップを抱えたまま、学校がどんどん忙しくなっていく状況に疑問を持った人の交流の場として「学校図書館研究会inオホーツク」を設立したのが今からちょうど10年前です。

学力向上の本質は、言語能力の向上です。一日24時間の中で、言語活動の量をいかに確保し、質を高めるかが学力対策であり、その中核となる知のインフラが学校図書館です。そこに気付く人をいかに増やし、仲間にしていくか——北海道学校図書館協会には、そのための膨大なノウハウの蓄積とマンパワーがあります。

時代はコロナ禍で大きな曲がり角を迎えています。情報に流されず、自分の頭で考え、適切に判断し行動する力を付けるため、今こそ学校図書館が本領を発揮すべき時です。これからも道内の学校図書館関係者が手を携え、子どもの学びと成長を支える場として、北海道学校図書館協会が発展し続けることを心から祈念申し上げます。

読む愉しさを伝える仲間とともに

元帯広市学校公共図書館研究会 会長 山崎 則夫
(釧路カトリック学園 柏林台カトリック幼稚園長)

30代で学校図書館研究会に加わり、退職まで続けられたのは、出会った図書館人が優しかったからです。仲間の純粋な人柄に心をひかれました。

1. 瞳が輝く読み聞かせ、そして新たな発見

高学年担任時代、『ふたりのイーダ』（松谷みよ子/著）を何日もかけて読みました。（私もドキドキして読んだので「読み聞かせた」ではない。）「イス」が動き出す、常識では考えられませんが、子どもたちは物語の世界に引き込まれ、翌日を楽しみにしてくれました。読み手は、読み聞かせるたびに、文字に隠れていた新たな発見に感動したものです。おそらく、今、一人で読んでもその感動は増えることでしょう。

2. 次世代へ読み継がれる絵本

孫に、娘のお気に入りだった絵本の一冊を読んであげました。30年前、毎晩せがまれて読んだ本です。忙しい育児の合間に「どこが楽しいんだろう。」と考えながら文字を拾っていました。孫は、ママのお気に入りだから、もちろん何度もリクエストします。感動です。孫には肩の力が抜けて、一緒に読み進めると、30年前に気づけなかった絵本の魅力に引き込まれます。絵本の奥深さに感動です。

3. 愛読書についておもう

「愛読書は？」と問われると、『のたり松太郎全集』（ちばてつや/著）と答えます。何度、どこから読んでも満足します。もう一冊は、『原始人の技術にいどむ』（岩城正夫/著）です。

学生時代からの個人研究である「火起こし」のマニュアル本です。同書の水準を超える技術も習得していますが、この本を手に私の研究は、まだ続きます。愛読書には、これらの2つの側面があるように思います。

紙媒体の読み物、図書館のない生活は想像できないし、なくなると確信しています。生涯にわたって、より自由な読書を楽しむ読み手を育てる学校図書館研究の発展を望みます。

北海道学校図書館協会と私のつながり、夢の実現にむけて

苫小牧学校図書館協会 事務局長 鈴木 祐 亮
(苫小牧市立錦岡小学校 教諭)

昨年、北海道学校図書館協会創立70年記念祝賀会が新型コロナウイルスの影響で、中止になったことを知ったとき大変残念でしかたがありませんでした。北海道の学校図書館教育の分野で活躍されている全道の方々や、北海道学校図書館協会を支えてくださった歴代の先輩たちとお会いするのを楽しみにしていたからです。

今は、苫小牧支部の事務局長という立場で、北海道学校図書館協会の一員として苫小牧の中にも仲間がいて、全道各地の方々とも様々な場面で交流をもってきましたが、振り返ると最初は「一人」からのスタートでした。2009年の北海道学校図書館研究大会釧路大会が私の北海道学校図書館協会との初めてつながりでした。当時白老町立萩野小学校に勤務し、学校図書館を担当していました。釧路大会に参加し授業を見ることができ大変有意義な経験をすることができました。その釧路大会で、全道各地に自分と同じように学校図書館を活用した教育活動を行っている仲間がたくさんいることを知って、交流することができたことが今につながっていると感じます。その時から、いつか苫小牧でも全道大会を開催することを夢見るようになっていました。

来年2023年は私にとって十年來の夢である北海道学校図書館研究大会苫小牧大会が開かれます。読書は「個人的な営み」であるにもかかわらず、図書館を活用した教育が目指すものは、「仲間とのつながり」ではないでしょうか。子ども一人一人が本を通して仲間とつながり、自分一人では発見できなかった新たな世界を獲得し成長していくところに学校図書館教育の魅力があると思います。私自身の「一人」から始まった歩みが、今ではたくさんのつながりに支えられていることとも似ています。コロナ禍で人と人のつながりをもちにくいなかですが、早く今までの活動ができるようになってほしいと願う今日この頃です。

2023年苫小牧大会でたくさんの方々とお会いすることを楽しみにしています。

北海道学校図書館協会創立70周年に当たって

「熱い思いを、仲間と共に」

北海道学校図書館協会 研究部長 山田 佳子
(札幌市立北郷小学校 司書教諭)

北海道学校図書館協会の活動は、校種や職種を超えて学校図書館に関わる方と出会い、自分に何ができるかを常に考えさせてくれる場となっています。担任としては、読書活動を柱とした学級経営を前進させるものであり、司書教諭としては学校全体の図書館活動を行うための大切なものでもあります。

初めての出会いは、まだ道立研究所で行われていた北海道学校図書館研修講座です。まだ学生だった私を導いてくださったのは、大井源一郎先生でした。現場を知らない勉強不足の私。日中のわくわくする読み聞かせや図書館装飾、そして授業での活用についての講座とともに、夜の交流会で遅くまで学校図書館について語り合う熱い姿に圧倒されてしまいました。

また、全道各地で行われている北海道学校図書館研究大会も、2年に一度の大切な研修の場であり、とても大きな刺激を受けています。どの大会に参加しても、各地に同じ志をもつ方々と出会うことができ、「なるほど」「もっと」という思いがむくむくと湧き上がってきます。特に、今年度開催の函館大会は、初めてのオンライン開催となりました。どのような状況にあらうとも、学校図書館へ向けた思いをつなごうとする強い覚悟があつてのことでした。

研究部員となってから直接研修講座や研究大会に関わらせていただくようになり、ますます学校図書館の大切さを感じています。そして、広く学校図書館教育への理解を深め、仲間を増やしていくことで、70年引き継がれてきたバトンを確実に次へと渡していきたいと思っています。

選定部の仕事：読んで、読んで、読みまくる

北海道学校図書館協会 選定部長 山本 裕子

北海道学校図書館協会選定部は、1年を通してその月に出版された新刊の児童書を読み、検討協議を重ねその月の推薦図書リストを作成し協会のHP上で公開している。そのリストを土台に「夏・冬休みにおすすめする本」「読書感想文コンクール・北海道指定図書」「北海道青少年のための200冊」が選定される。

世の中には、カリスマ書店員や読書家の芸人や女優、書評家、各メディアと実に多くのお薦め本リストが溢れている。私ども選定部のリストがそれらと一線を画するのは、選定の軸足と視点が学校図書館と教育現場にあることである。

選定活動は、月に2回（第2と第4木曜日）の選定研修会（以下、選定会）で行われる。16時からの開催ではあるが、定時に部員全員が揃うことはまずない。学校現場は常に何かが起こるところである。諸々を片付けて来る訳で大方が揃うのが18時を過ぎることも珍しくはない。

選定会は幼児・小低、小中、小高、中学、高校の5チームに分かれて行う。運び込まれた図書のレベル分け（早く着いた部員の仕事）されたすべてを、チームの全員がひたすら読む。読了後に各自が薦めるものをチーム全員で検討協議をし、選ばれたものがその月の推薦図書となる。

選定会に取次から運び込まれる図書は、2週間の間に取次に入った新刊で児童書の括りで自動選書されたものである。そのためゲームの攻略本や豪華な大型しかけ絵本、小学生のための恋愛指南書等々選定が難しいものも多々入ってくる。が、すべてを持って来てもらうのは、取次での善意の介入やバイアスの排除のためである。

高校については選定対象図書がほぼ一般書のため、選定会での選定はほとんどできない。概ね書店で新刊チェックをし、その後に読み、検討協議となるため時間的にも色々苦勞が多い。

選定会での検討協議では、「どう授業で使えるか」「単元資料としてドンピシャ」「絵と文のバランスが?」「本の作りに対して内容が難しすぎる」「総ルビがかえって読みづらい」等々の多くの見解が飛び交う。学校図書館資料としての活用の工夫や問題点までに及ぶ検討協議こそが選定研修会、選定部の真骨頂である。発表されたリストにはその過程が載ることはないが、すべてのリスト掲載図書は選定部員が必ず読んだ本であることを改めて伝えたい。

選定会ではひたすら本を読み、濃密な研修で時間が過ぎていくが、更に選定過程の判断や技術や情報を共有し選書力を高めるため、3年前から選定部独自の研修会を長期休業中に行っている。

選定された本が学校図書館の蔵書となり、顔となり、歴史となり、児童生徒の「あの時の一冊」になること、学校図書館が紡ぐ物語となることを願って、選定部員は今夜も本の虫と化している。

創立70周年に寄せて

北海道学校図書館協会 事業部長 図師 広光

(北海道北広島西高等学校 司書教諭)

私が勤務する高校の図書館には約4万冊の蔵書があります。書庫には、貴重な資料も多く『北海道の学校図書館－北海道学校図書館協会創立50周年記念誌』も大切に保管されています。約300ページに及ぶことから、これまでの活動の歴史を紐解くことが出来ます。昭和20年代の草創期から現在に至るまで、道SLAは沢山の先生方に支えられてきたことが実によくわかります。皆様の図書館活動に心から敬意を表します。

さて、私が道SLAに所属したのは、平成20年度からで、現在の勤務校に着任した年です。当時の事業部長は、故飯島道恵先生でした。事務局の会議やコンクールの審査会等で月に1度はお目にかかりました。朝一番に会場に入り、夜も遅い時間まで、まさに身を粉にして事業部の仕事に集中されていました。次第に、少しずつ私も仕事を任されるようになりましたが、飯島先生のコンクール事業への情熱は常に伝わってきました。

毎年12月に「青少年読書感想文全道コンクール兼北海道指定図書読書感想文コンクール」の表彰式が行われます。校内審査、支部審査、そして全道の審査会によって選ばれた作品を書いた生徒が晴れの舞台に上がります。中には、毎年ここへ戻ってくる生徒もいます。昨年はコロナ禍の影響で、表彰式は中止となりましたが、今年は二部制という新しい形をとりながら、先日無事に実施することができ、嬉しい気持ちになりました。表彰式の朝、私は毎年飯島先生を思い出します。表彰される生徒達が主役なのは間違いありませんが、飯島先生が受賞者の一人一人に寄り添い、緊張した面持ちのこどもたちに優しく声を掛けられていた場面を今でもよく覚えています。

表彰式の記念撮影に写る生徒たちは成長し、社会でもきっと活躍していることでしょう。読書の力は素晴らしいものです。

最後になりますが、北海道学校図書館協会創立70周年おめでとうございます。

■ あとがき

手元に、本協会の創立50周年記念誌があります。厚さ18mmの重厚な冊子です。当時の会長であった大東 紘 氏の巻頭言に始まり、協会や各支部、事業などの歩みを詳細に紐解けるクロニクルです。令和元年に70周年を迎え、令和2年に記念祝賀会を予定していましたが、想定外のコロナ禍となり中止せざるを得ませんでした。50周年記念誌のような立派な刊行物は叶いませんが、20年を経た現在の活動の様子を、周年行事としてささやかながら記録・発行でき嬉しく思います。執筆していただいた顧問、関係団体、支部、事務局各部の皆様、ご協力いただき心よりお礼申し上げます。

※50周年の記念誌残部があります。希望者にご連絡を。

Amenity B-Coat

本の破損や汚れを防ぎながら、抗菌効果を発揮するブックカバー「アメニティBコート」ポリプロピレンフィルムのため、燃焼時にも塩素ガスなど有害物質が発生せず、安心です。ご指定の上ご愛用下さい。

キハラ株式会社

〒062-0035 札幌市豊平区西岡5条3丁目8-15
TEL (011) 857-3331
FAX (011) 857-5211



「読書感想文コンクール表彰式」特別賞の表彰を2部制にして実施。副知事、道教育長、道立図書館長から祝辞を賜った。1次・2次審査も2部制にして行った。この年は3名が全国表彰を受けた。



「北海道学校図書館研究大会」50周年の1999年札幌での開催から隔年で、北見、苫小牧、旭川、函館、釧路、音更、小樽、室蘭、札幌、旭川、昨年の函館（オンライン）、R5苫小牧と綿々と続く。



1月は「北海道学校図書館研修講座」「読書感想画コンクール（写真は審査の様子）」「HBC中学生作文コンクール表彰式」と大忙し。研修講座は初のオンライン開催。100名以上の参加があった。



2012年（平成24年）4月からホームページを刷新。バージョンアップして内容が充実。ホームページの情報から問合せをいただくことが増えた。事務局会議や全道研究部長会ではオンラインを活用している。

事務局

事務局長 佐藤 正行 (札幌市立西岡南小学校長)
事務局校 札幌市立西岡南小学校
〒062-0034 札幌市豊平区西岡4条12丁目7-1
TEL 011-582-6350 FAX 011-582-1590

編集：村山 知成 杉本 操 野村 邦重
大久保 雅人 佐藤 正行

ホームページアドレス
<http://sla.gr.jp/~hokkaido-sla/>